

### 3. 皮膚疣状結核 warty tuberculosis, tuberculosis verrucosa cutis

#### 症状・病理所見

外傷を生じやすい四肢末端や殿部などに好発する (図 26.3)。数個の硬い小結節が融合拡大し、周辺が疣状の紅色局面を形成する。遠心性に拡大し、中心は治癒傾向ないし癬痕を形成する。病理組織学的には非特異的な炎症反応がみられ、Langhans 型巨細胞や膿瘍が真皮上層にみられる。染色しても抗酸菌はみられないことが多い。

#### 病因

結核菌による皮膚感染、すなわち真性皮膚結核の一種である。結核菌に対してすでに免疫がある人の皮膚に、外傷などから新たな結核菌が侵入 (接種) して発症したものである。

#### 診断・鑑別診断・治療

ツベルクリン反応強陽性や病理所見による。組織や膿汁からの菌の分離や PCR 法も行われる。尋常性疣贅、クロモブラストミコーシス、尋常性狼瘡、股部白癬などが鑑別診断として重要である。抗結核薬によく反応する。

## b. 結核疹 tuberculid

結核菌に対する免疫反応によって生じると考えられている皮膚疹を結核疹 (tuberculid) という。肺など他臓器に結核病巣が存在することが多い。結核菌あるいは結核菌に関連した抗原が血行性に播種することで、皮膚に免疫反応を生じたものと考えられている。結核菌に対する強い細胞性免疫をもつ個人に発症し、ツベルクリン反応は著しく強い反応を示す。結核疹の病変から結核菌は検出されないが、PCR 法で陽性になることがある。抗結核薬によく反応することも結核疹の特徴である。

### 1. 硬結性紅斑 erythema induratum (Bazin) ★

→ 18 章 p.355 参照。

### 2. 丘疹壊疽性結核疹 papulonecrotic tuberculid

結核菌に対するアレルギーによって生じる血管炎と考えられており、結核疹の一種である。青年の四肢伸側、とくに肘頭や



図 26.3 皮膚疣状結核 (warty tuberculosis) 辺縁疣状角化性紅斑性局面。遠心性に拡大する。中心部に治癒傾向を示す。



図 26.4 腺病性苔癬 (lichen scrofulosorum)



図 26.5 陰茎結核疹 (tuberculid of the penis)

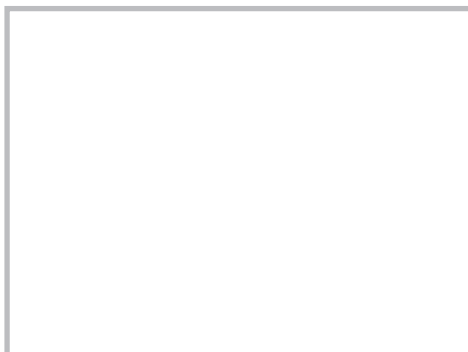


図 26.6 腋窩リンパ節腫脹 (axillary lymphadenopathy)

膝窩に好発する。1 cm 大までの大きさの暗紅色丘疹が対称性に多発し、膿疱、壊死、潰瘍を経て瘢痕を残して治癒する。このような皮疹が次々と出現し、新旧の皮疹が混在した状態で慢性の経過をたどる。皮膚白血球破碎性血管炎(11章 p.163 参照)や苔癬状枇糠疹(15章 p.291 参照)などと鑑別を要する。抗結核薬が有効である。

### 3. 腺病性苔癬 *lichen scrofulosorum*

直径1～数 mm の常色～紅色に扁平隆起した丘疹が、体幹や四肢に散在性、ないし集簇融合して局面を形成する(図 26.4)。毛孔一緻性に生じることもある。自覚症状はほとんどない。病理組織学的には、毛包や汗腺周囲に類上皮細胞と Langhans 型巨細胞を認めるが、乾酪壊死はなく、組織培養にて結核菌は証明されない。抗結核薬による治療により1～2か月で治癒する。

### 4. 陰茎結核疹 *tuberculid of the penis, penis tuberculid*

陰茎に限局した丘疹壊疽性結核疹(前述)である。腎結核や膀胱結核をもつ者に発症しやすいとされる。亀頭や陰茎に有痛性の潰瘍を生じる(図 26.5)。臨床的に陰茎癌との鑑別を要する。

## c. BCG 副反応 adverse reactions to bacillus Calmette-Guérin vaccine

日本では生後1年未満の乳児に対して、弱毒化したウシ型結核菌 (*M. bovis*, Tokyo172 株) を接種する BCG ワクチンが結核予防目的で実施されている。生ワクチンであるため、まれに感染が成立して真性皮膚結核や結核疹に準じた症状をきたす。

#### ① Koch 現象 (Koch phenomenon)

結核未感染の健常人に BCG ワクチンを接種すると、約4週間で接種部位に痂皮を伴う丘疹が形成され、その後自然退縮する。一方、すでに結核感染が成立している者に BCG ワクチンを接種すると、細胞性免疫が確立しているために数日で接種部位に著明な発赤をきたす。これを Koch 現象という。

#### ② 腋窩リンパ節腫脹 (axillary lymphadenopathy)

BCG 副反応として最も高頻度に見られ、接種者の約0.7%に生じる。接種1～3か月後から、接種した側の腋窩リンパ節が腫脹する(図 26.6)。腋窩以外にも生じることがあり、BCG 肉芽腫 (BCG granuloma) ともいう。自覚症状に乏しく、数か月から1年程度で自然消退するが、まれに拡大して潰瘍化し、